

自然災害を描いた

海外の児童文学作品

佐々木赫子

火山噴火 自然災害を巧みにとりいれて、世界的成功を

おさめた小説は、エドワード・ブルワーリットン『ポ
ンペイ最後の日』(一八三四年)である。イタリア南部のヴ
ェスヴィオ火山の麓、ナポリ湾に面する町ポンペイを舞台
に、金持青年とその恋人の美女をめぐる、美女に横恋慕
するインスの女神の神殿の司祭や、裕福な市民に寄生する
貧乏貴族、主人公の青年にひそかに想いを寄せて献身する
奴隷少女、信仰を守りぬく当時禁教のキリスト教徒など、
善玉悪玉入り乱れる一大ドラマに仕立てた。主人公に危険
が迫った時、ヴェスヴィオ火山が爆発・大噴火を起こす。
恋人たちはナポリ湾を舟で逃れるが、人も動物も建物もす
べて降り積もる火山灰に埋もれて、ポンペイの町は消滅した。
史実に残る紀元七九年のヴェスヴィオ火山の大噴火である。

竜巻 ライマン・フランク・ボームの、米国カンザス州

の少女が竜巻に巻き込まれてオズの国へ吹き飛ばされる
『オズの魔法使い』(一九〇〇年)はミュージカル映画にも
なった。映画と原作の筋立ては少し異なるが、家に帰らな
さに、少女が知恵と勇気で次々と困難に打ち勝つ設定は、

作品発表当時の米国民の特長だった楽天性を示している。

ロビー・ブランスクアの『たつまきでお屋敷は消えた』
(一九八三年)では、米国アーカンソー州の大地主と、その
屋敷の黒人使用人、小作人の貧乏白人の三組の家族が、竜
巻で屋敷が吹き飛ばされたため、貧乏白人が地主に借りて
住んでいた狭い小屋で同居するはめになる。貧乏白人の少
女は地主夫人の態度に屈辱を味わいながら、家賃代わりに
無給で毎日屋敷内の雑用に使われていたのだが、財産一切
を失ってなお傲慢で冷酷な地主夫人を、ますます憎むよう
になる。個人的資質もさりながら、貧富の差や黒人奴隷制
度の歴史など社会的システムが人間性をいかに損なうか、
一方、自然や動物との接触がいかに他者への共感力を育て
て人間同士を結びつけるかを伝えて、読みごたえがある。

アイヴィ・ラックマンの『たつまきの夜』(一九八八年)は
実際に米国ネブラスカ州の小さな町で一九八〇年に発生し
た竜巻を描いている。雷雲に触発されて生まれたトルネー
ド竜巻は、三時間にわたって猛威をふるい、町のメインス
トリート沿い六ブロックを完全に破壊した。両親の留守中